

- (4) 卓上の小型辞書では、本稿に取り上げる明治初期の「精を出す、努力する」義は、現代通用の用法とやはりそぐわない感があるのか、大きく記述を構えず「学問や仕事に」といった表現で処理するが、例えば一卷本でも『大辞泉』・『大辞林』など大型のもので比較的古い用法などにも目を向けているものには、福沢諭吉の例文等を挙げる形で枝項目を立てて該用法を記述する場合もある。
- (5) 記号 S はサ変動詞用法、記号 N は形容動詞用法が存することを示す。
- (6) I II III はそれぞれ I 版 II 版 III 版に於ける掲出形であることを示す。日本語形は原文ローマ字表記をカタカナ表記で挙げ、掲出の順番は概ね該資料の早い版に於ける出現順位を優先して示した。英熟語用例部分に関しては省略した場合がある。
- (7) 註 1 拙稿参照。なお、* の付いた 2 語は、「see 勉強 and 尽力」となっている。

に於いても同様に、「see 勉強」の記述を有する項目が、次の通り多く見られる。

・勉勵 勉力 研磨* 研精* 勸勉 磨勵 勵精 精勵 切磋 切磨
辛勉 出精 淬勉 淬勵 錐股

ヘボン辞書に収載される漢語と、幾種かの漢語辞典を参照している『漢語英訳辞典』に載せられる漢語とでは、その性格に幾ばくかの懸隔が存することを差し引いても、これだけ辞書資料中で活躍しているということは、明治初期の「勉強」が「精を出す」義を有する語彙の中で、いかにその中核的なものの一つとして振る舞っていたのかを物語って余りあるところではなかろうか。

Ⅳ. おわりに

明治初期に於ける漢語「勉強」は、「精を出す」義で以て主に用いられる。本稿では、翻訳資料『西国立志編』の用例と対訳辞書『和英語林集成』英和の部の記述から、「勉強」の具体的な用法とその周辺に存する語彙とを粗述したにとどまった。次稿に於いては、継続中の近世期文献資料や近代小説類の調査結果も交え、「勉強」の意義用法が現代に於いては「学習する」義に偏り、明治初期に中心的であった「仕事、職業に精を出す」義を縮小させた過程と、背後にあるその原因とに就いて、さらに詳しく検討して行くつもりである。

なお、「精を出す」義の漢語「勉強」に就いては、その形容動詞用法には「勤勉」が、サ変動詞用法には「努力」が、現代に於いて各々の後継に位置する漢語として想起される。この「勤勉」・「努力」は、例えば『和英語林集成』英和の部に関する今回の項目調査中に於いてはⅢ版に至っても未だ収載を見ないが、和英の部ではⅠ版・Ⅱ版で立項されなかった両者が項目を得て記述されている。こうした動きも含め、今後更に多くの対訳辞書資料に就いても引き続き調査検討を行いたい。

註

- (1) 拙稿：「近代漢語の一側面——『漢語英訳辞典』に見られる二字漢語のサ変動詞用法をめぐって——」語文研究 第七十七号。
- (2) 『岩波国語辞典』は第四版に拠る。『西国立志編』の底本は九州大学蔵本（明治年刊）に概ね拠るが、一部講談社学術文庫も参照した。用例末〈〉中の数字は『西国立志編』中の所在を示す。例：〈1.14〉は「第一編十四」。また、用例文中の（）は左ルビを示し、右ルビはRで示している。表記は支障のない範囲で現行のものに改めた。
- (3) アンケート調査では他に、③お店で商品の値段を安くする、まける……使用する27名（71.1%）という結果も得られた。この用法に就いては、若い世代の一部に於いては、使用する機会が若干失われてきているようである。

A09/studious: ベンキョースル I II III セイダス I II III

キンガクスル I II III

A10/toilsome: クローナ I II III ホネノオレル I II III ロースル I II III

《英語副詞項目》

M01/actively: (I 項ナシ) イソイデ II III ハヤク II III カセイデ II III

ホネオッテ II III シュッセイシテ II セイダシテ III

ハタライテ III ベンキョーシテ III

M02/studiously: (I 項ナシ) ベンキョーシテ II III ネンライレテ II III

キヲツケテ II III

以上の用例に就いて、「精を出す」義に関わる代表語句類の出現具合を捉えやすく整理すると、次の表のようになる。

	骨折る類	勉強する類 (なる)	精出す類	励む類	出精する類	労する類	苦勞する類	つとめる類	かせぐ類	念入れる類
英語名詞群 N01~N08	5	3	1	3	1	1	2			
英語動詞群 V01~V13	7	2	6	3	4	3	1	2	1	
英語形容詞群 A01~A10	6	7(4)	3	5	1	1	1	1		1
英語副詞群 M01・M02	1	2	1		1				1	1
出現項目数合計	19	14(4)	11	10	7	5	4	3	2	2

上表からは、「精を出す」義の「勉強」を取り囲む語句類の大体が知られる。「骨折る」「精出す」「励む」「出精する」の出現頻度が高く、「つとめる」はそれらに比して思ったほど掲出は盛んでない。それだけに、「勉強」の使われ方がかえって目立つと言っても良い。「骨折る」には及ばないが、名詞・動詞・形容詞・副詞の各対応領域で用いられており、特に対象項目数自体が少ないものの、英語副詞に対応する「勉強して」は両項目に掲出され、『西国立志編』に於ける使いでの良さを思わせる扱いとして捉えることが出来そうである。

なお、英語形容詞項目に於いては、「勉強な(る)」の形容動詞型とともに、「勉強する」のサ変動詞型も挙げられている。これは、名詞を修飾する際に両形とも使用可能であることによるものであろうが、当代の対訳辞書に於いてはしばしば見受けられる現象である。

和語表現の「骨折る」「精出す」「励む」に混じって、「勉強」は漢語出自としてはかなり中心的に意味説明に用いられるが、これは例えば、J. H. ガビンズ著『漢語英訳辞典』(明治22~25年刊)のような漢語辞書の影響が強い資料^(註7)

- V04/drudge : ホネオル I II III
- V05/ (effort項中) to make an effort : セイダス I セイヲダス II III
シュッセイスル II III
- V06/endeavor : セイダス I タメス I II III ベンキョースル I
ヤッテミル II III シュッセイスル II III ホネオル I II III
- V07/exert (I 版は - one's self) : セイダス I II III
シュッセイスル I II III ツトメル III ホネオル III ツキハテル I
ガッカリシテオル I
- V08/labor (v.) : シゴトヲスル I II III ホネオル I II III
シュッセイスル II III ロースル I II III
- V09/plod : (I 項ナシ) ホネオル II III ローシテアルク II III
- V10/ply : ホネオル I II III ハゲム I II III カセグ II III
- V11/strive : セイヲダス I II III ハゲム I II III ハル I II III ホネオル III
- V12/struggle : モミアウ I II III セイヲダス I II III アガク I II III
アセル I II III セリアウ II III
- V13/toil (v.) : ホネオル I II III クロースル I II III ロースル I II III
シンクスル I II III カセグ II III
- 《英語形容詞項目》
- A01/active : ハヤイ I テバヤイ I マメヤカナ II III カセグ II III
ホネオル II III ベンキョーナ III カッパツナ III ハタラク II III
イソグ II III
- A02/ardent : アツイ I フンパツナ II ハゲンデ II アツクナル II III
ハゲシイ III セツナル III ネッシンナル III
- A03/assiduous : (I 項ナシ) ハゲンデオル II ハゲム III
ベンキョーナル II ベンキョーナ III セイダス III
- A04/diligent : ベンキョースル I ベンキョーナル II III ツトメル I
ユダンナク I セイダス I II III ホネオル I II III オコタラズ I
モッパラニ I ハゲム I II III
- A05/industrious : ホネオル I II III シュッセイナル II III ミミチイ II III
ベンキョースル III ヨクハタラク III
- A06/intent : (I 項ナシ) ネンイレテスル II III ハゲンデオル II III
ココロザシフカイ II III ベンキョースル III コル III
- A07/laborious : ホネオル I II III ハタラク III
- A08/sedulous : ホネオル I II III ハタラク I II III ベンキョーナ I II III
マメナ I II III ハゲム II III

③副詞的用法として「勉強して～スル」の用法があり、割合によく使われる。これからすると、サ変動詞としての「勉強する」は明治初期に於いて、例えば①・③等から、現代よりもより和語動詞「つとめる」との意義的・文法的親縁性を有する形で用いられていたものとして捉えられる。

Ⅲ. 『和英語林集成』英和の部に見る「勉強」とその周辺の類同義語

ここでは、対訳辞書資料で漢語「勉強」及びその周辺にある類義の語彙がどのように表れているかを見て行きたい。

J. C. ヘボンの『和英語林集成』英和の部に於いて「勉強」を含む項目を中心に、「精を出す、努力する」義に関わる語が掲載されているものを含めて抽出すると次のようになる^(註6)。

《英語名詞項目》

N01/application: (I 項ナシ) ツケルコト II III アテルコト II III

ネガイ II III タノミ II III ベンキョー II III ハゲミ II III

テキヨー III オーヨー III

N02/diligence: (I 項ナシ) ベンキョー II III ハゲミ II III ホネオリ II III

N03/effort: イキミ I イッキョ I ヒョーリ I セイダスコト II III

トタン I II III

N04/exertion: (I 項ナシ) シュッセイ II III タンセイ II III タイギ II III

N05/industry: ホネオリ I II III ハゲムコト II III ベンキョー III

N06/labor (n.): シゴト I II III ホネオリ I II III ハタラキ I II III

サン I II III

N07/toil (n.): ホネオリ I II III クロー I II III ワナ I II III

N08/trvail: ホネオリ I II III クロー I II III ロー I II III サンスル I II

サン III

《英語動詞項目》

V01/apply: タノム I II III ネガウ I II III アテガウ I オク I II III

スエル I アテル I III アテガウ II ツケル I II III ハル I

ツク II III ツケル II III カナウ II III タノム II III ソエル II III

テキスル III アタル III タズネル III ココロヲモチイル III

ミヲイレル III ハゲム III

V02/attempt: タメス I II III セイヲダス I ヤッテミル II ココロミル III

V03/attend: ネンヲイレル I キヲツケル I キク I ツトメル I II III

トモナウ I ツキシウ II III ハベル III ベンキョースル III

シュッセキスル III ダンカイスル III

たかと思わせるのである。

①型のような四字漢語形の場合、「副詞＋動詞句」が一複合語内にその構成を持ち込んだ形であるといってもよいが、このことはまた、当代に於いて和語「つとめて」が次のように所謂複合動詞の形式で「つとめ～スル」構造を取って用いられていることに目を向けさせる。

- ・成句に入りて、同語の異義を成すものあり、「骨を折る」は、骨を取りて正（マサ）しく折るにはあらで、「勉め働く」意をなせり

（『言海』初版・凡例五十二）

こうしたあたりにも、やはり「勉強する」と「つとめる」との相似た関係が垣間見られると言って良いのではないか。

なお、上記引例部以外にも目を向けると、「勉強」を含む四字漢語全体が副詞的にはたらいっているように見られる例も、次のように存する。

- ・我もし吾国の為に何事を為すとも吾が当然の分とするところのものは特に勉強忍耐してその事を思察するのみと云り 〈4.3〉
- ・許多（Rアマタ）の国の語言（コトバ）に通じたれども尋常（アタリマヘ）の学芸に疎（Rウトカ）りければ一意勉強して自（Rミ）ら算術及び字を書する事を習ひ 〈11.37〉

これらは、「勉強して」「つとめて」に置き換えても通じるようであり、「勉強」が副詞的用法に関連してよく起用されることと、軌を一にするものと捉えられる。

なお、②－2中の「熱心勉強」に就いては、当代「熱心」には、次例のようにサ変動詞連用形に助詞テが下接して副詞として用いられる用法が存したようである。

- ・Nes-shin | 心, enthusiasm; ardour; eager; *enthusiastic*; *nes-shin shite*, eagerly.

（『漢語英訳辞典』）

②－3に就いては、先にヲ格を取る「勉強する」を検討した際に見たように、「工事を勉強する」の句が該資料中に存しており、同じ構成原理に基づく四字漢語形の造語と見られる。また、③の「自己発奮勉強」引例部分の三行前（第九編十五丁表）には、圧縮した「発奮自勉」の語句が見られ、当代に於ける四字漢語形式への志向とともに二字漢語の組み合わせ・圧縮を経た造語の具体的な過程が伝わってくるようで興味深い。

以上、『西国立志編』に見られる明治初期の漢語「勉強」の用いられ方に就いて用例を検討してきたところから主な特徴をまとめると、次のようになる。

- ①意義上、「仕事に精を出す」義が主となる。
- ②文法上、形容動詞用法が存在する。

勉強労働 S・他人の為 (R タメ) に勉強労働する事を楽しみ為すべきなり
〈11.22〉

②：「勉強」後置型

②-1：サ変動詞 (又は形容動詞) 語幹連続型

恒耐勉強 N・定志ありて恒耐勉強なる事によく人を助くるには 〈5.21〉

困苦勉強・機器建造 (ツクル) の法 (シカタ) を研究し困苦勉強久ふして
怠らざりしが 〈2.8〉

辛苦勉強・特にあまたの辛苦勉強によりて 〈6.1〉

専精勉強・其友に就きて法国文法書を学びしがその才思の顕悟 (サトキ)
なると専精勉強の力とに由り久しからずして善く文法に通ずる
〈11.37〉

忍耐勉強 N・寺門或ひは街中の燈ある処に就きて課業を為せり。かくの如く
忍耐 (シンボウ R タイ) 勉強なるに由て 〈1.17〉

発奮勉強 S・心志の力にて発奮勉強する事を能し得べし 〈8.6〉

②-2：連用修飾語 + 被修飾語型

一意勉強 S・毎日たゞ時の間だと雖ども無益の事に費さず又苟且 (カリソメ)
に過ごさずしてこれを進修の事に一意勉強せんには 〈9.21〉

自己勉強・多克未爾 (R トークヴィール) は自己勉強の力を出し 〈1.33〉

専一勉強 N・人の卓絶の名を成すは偶然天幸に非ずして専一勉強なるに由る
なり 〈6.2〉

熱心勉強 S・休弥爾列爾 (ヒウミルレル) 亦た事物を観察するの才ありて文
芸學術を熱心勉強する人なり 〈5.36〉

勇猛勉強 S・汝もし実心に勇猛勉強せんと志を立てば 〈8.10〉

②-3：目的語 + 動詞型

工事勉強・工事勉強の学校となすべく學術の学校となすべく 〈12.7〉

③：その他

自己発奮勉強・汝の餓死すると餓死せざるとは汝の自己発奮勉強すると否ら
ざるとに關係するなり 〈9.6〉

上記用例中、「専精勉強」の引例箇所は偶々學問上の努力を指すものと取れ
るが、他はやはり學業にとらわれず様々な困難に対して「精を出す」義で用い
られており、二字漢語「勉強」の有り様と相違はないと言える。

これだけ豊富に四字漢語形が見られるところに、当代の「勉強」の使い勝手
の良さの因の一を窺うことが出来るのではないか。つまり、「勉強」が前置さ
れる①型の多さを先の「勉強して」と重ねて見るとき、やはりこの副詞的用法
が、漢語「勉強」を重宝なものとして使用させる確固たる基盤の一つではなかつ

治初期に於ける両者の密接な関係ぶりは広く見受けられるようである。

- ・コヤ女子（おなこ）なにを因循（マゴ〜 R いんじゅん）してをるか勉強（ツトメ R へんけう）して神速（スミヤカ R しんそく）にせい
〈初.14オ〉

さらに、「勉強する」と「つとめる」の親しい関係を窺わせるものとして、『西国立志編』には、次のように、二格をとる例も存する。

- ・至微至賤の民と雖どもその職事に勉強し平生の為（R スル）ところ正直忠厚節廉にして 〈1.8〉
- ・英国の人民職事（シゴト）に勉強する事 〈2.1〉
- ・職業（シゴト）に勉強する精神ある事その一なり 〈2.1〉
- ・平生端厚信実にして職事に勉強し清約を以て自（R ミ）ら奉ぜしなり
〈10.26〉
- ・撤母耳（サミユール）徳留（ドリウ）はその一生職事に勉強する事慣（ナラフ）て性となりたるは 〈12.15〉

「勉強する」が目的語相当をとる際には、現代ではヲ格をとるのが通例であり、『西国立志編』中でもヲ格をとるサ変動詞用法が先のように見られる。それに対して二格をとる例があることに就いては、例えばその背後に「〜二十つとめる」の句形の存在を考えることが出来そうである。ただし、二格を取るものが4例と比較的少なく、助詞ニに前接する名詞が「職事（シゴト）」「職業」と特定のであったことは、弾力的に様々な名詞を対象に出来るほど広範な用法ではなかったことも窺わせる。

なお、漢字が四字連続する形が多く見られるのは明治初期に於ける漢語の特徴的な用法の一つであるが、「勉強」をその構成要素に含むものに就いて見ると、『西国立志編』には次のように見られる^(註5)。

①：「勉強」前置型

勉強恒耐・勉強恒耐（R タイ）の慣習を長ぜしむべし 〈11.43〉

勉強従事 S・額蘭未爾（R グランヴィル）沙伯（シャープ）黒奴売買の事を禁止する事に勉強従事したりし時 〈12.18〉

勉強忍耐 S N・天下は勉強忍耐なる人の所有（モチモノ）なり 〈10.18〉

勉強学習 S・夫文芸の事百工の業これを勉強学習する人 〈1.7〉

勉強刻苦 S・勉強刻苦せる伝法教師馬礼遜（R モリソン）は履法（R クツノカタ）を作る工人なりしなり 〈1.13〉

勉強勞苦 S・瓦徳（R ウアット）は最も勉強勞苦せる人と称すべし 〈2.7〉

勉強勞作 S・故に人その心を運（R メグラ）しその手を動かし勉強勞作するものは 〈11.22〉

い人間も多いのであろうか、手近の現代国語辞書を何種か参照して見ると、代表的な記述としては次のようなものが多い^(註4)。

【勉強】〔名・自他スル〕①学業や仕事に精を出すこと。「試験——」②学問や技術を学ぶこと。また、修業や経験を積むこと。「失敗もいいーだ」③〔俗〕商品を安く売ること。 (『集英社国語辞典』)

つまり、「勉強する」が「仕事に精を出す」義に用いることを示唆する形の記述が一般的なようである。これは、「勉強」を解説する際に用いられる「精を出す」・「努力する」・「励む」といった語句が、「学業」ばかりでなく「仕事」についても普通に用いる語群であり、「勉強」もそれに取り込まれるように捉えられているといった事情からであろうか。

しかしながら、ともかくも、現代の少なくとも若年層に於いては、もはや明治初期にありふれていた「仕事に精を出す」義の「勉強する」とは、かなり距離が出来てしまっていると言わざるを得ない。

また、次のように、『西国立志編』では「勉強して」の形が副詞的に用いられる例がある。

- ・邦民の勉強して工芸を為（Rナ）すに由て 〈1.6〉
- ・舌氏は深沈（オチツキタ）なる書生にして勉強して業を做（Rナ）せる人なる 〈1.12〉
- ・勉強して光陰を造れば光陰化して黄金となると云う義にして 〈4.5〉
- ・多年勉強して測算せしところの稿紙をして一朝灰燼に化せしめ 〈4.13〉
- ・勉強して心を用ふる事 〈5.1〉
- ・他時勉強して補償（ツグノヒ）し務めて一時たりとも虚しく度ら（Rワタラ）ざらん事を期せり 〈5.24〉
- ・これを忽（ユルガセ）にせず勉強して講明しければ 〈5.32〉
- ・弗氏勉強してこれに倣（Rナラ）ひ 〈6.12〉
- ・予この書を視る事宝庫の如く勉強してこれを学び 〈6.15〉
- ・蓋し勉強して心を用ふる事はその始は難けれども 〈8.4〉

これらもまた現代の「勉強」の用法では容易に受け取りがたいところがあるが、これは「つとめて〜スル」の「つとめて」に「勉強して」を置き換えた形として見れば、分かり易い。先に意義上の相関を見た「勉強」と「つとめる」であるが、ここでは文法上もその用法に於いて通いあうものが見られるのである。また、ここで見える「勉強して」の用例では、下に続く動詞句に様々なものが現れ、割合便利に使われる副詞句形として通用していたことを窺わせる。

なお、「勉強して」と「つとめて」の交替乃至は置換に関しては、仮名垣魯文『牛店雑談安愚楽鍋』（明治4年刊）にも次のような箇所が存するなど、明

- ・職業を勉強する事は身体（カラダ）をして壮強ならしむるの益あり
〈2.2〉
- ・その家業を勉強する間に心智を研（Rミガ）かんと欲し 〈4.21〉
- ・特に本分の業を勉強し儉素を守り徳行を崇ふせしに 〈4.21〉
- ・方向を善くして学業を勉強すべき事 〈11.9〉

違和感が生じるのは、現代に於ける「勉強する」の用法が「学習する、学業に励む」或いは「未修得の技能に就いて修得すべく練習する」義が一般的であるのに対し、明治初期の上記例などが、単に「一生懸命に働く」ことや「精進する」ことを指して、必ずしも「学業」とは結びついていない点である。そのことは目的語として「家業」・「職業」等を取っていることから明らかであるし、〈11.9〉の用例のように「学業を勉強する」の形の存在は、先に挙げた所謂形容動詞用法に於いても「精を出して仕事に励む」の義が主であったように、特に「勉強」が主に「学業」に関してのみ使用されるといった制限のなかったことを確認させる。

こうした意義範疇の広さは、ちょうど和語「つとめる」のそれを想起させる。実際、『西国立志編』中では上例〈2.2〉の直前には、

- ・労苦の職業（シゴト）を勉め做す事は最（モ）善（キ）の教養（ヲシヘソダテ）なり

とあり、「職業を勉め做す」と「職業を勉強する」とが呼応するように用いられている。当時「精を出す」義で「勉強」と「つとめ（る）」が密接に対応するものと捉えられていたことは、次の『和英語林集成』「勉強」項の和らげ部分の具合などからも容易に推し量ることが出来よう。

- ・BENKIYô, ベンキヤウ, 勉強, (tsztome.) Industrious, diligent. 〈I 版〉

明治初期の漢語は一字一字がかなり独立して意識されていることが現代に比して多いことから、「つとめる」と「勉強する」が「勉」字をなかだちとして置換が極容易な間柄であったことが想定されるのである。

さて、上記のような明治初期の「勉強」の意義用法に若干の違和感を覚えるのは筆者だけではないようで、漢語「勉強」の語義に関して大学生38名を対象にアンケート調査を実施したところでは、次の結果を得ることとなった^(註3)。

- ①学業に励む ……………使用する38名（100.0%）
- ②仕事に励む ……………使用する2名（ 5.3%）

この調査結果からすれば、「勉強する」は「学業」に関して使うのが現在通常の用法であって、「職業・仕事」に関して「勉強する」とはむしろ言わないといった意識が概ね定着している状態を看取出来るのではなかろうか。

ただ、「仕事」に就いて「勉強する」と使う用法に、或いは未だ違和感のな

- 詐欺・その言語真実にして詐欺ならず 〈12.41〉
- 卓越・これ等の卓越（スグレタル）なる人 〈1.14〉
- 痛苦・甚だ痛苦なる病 〈4.16〉
- 繁盛・各般（イロ、）の工事場益々繁盛なりけるが 〈2.10〉
- 貧苦・その早年貧苦なりし時 〈10.12〉
- 勉強・懶惰の人をして勉強ならしめ 〈1.2〉 他

『漢語英訳辞典』の調査からも予想されたところであるが、二字漢語を粗々調べただけでも、以上のように『西国立志編』では割合多くの語に於いて現代の用法とは異なるものが見られる。

そして、これらの中で量的に割合目立つのが「勉強」であり、所謂形容動詞として用いられた③用法の例は、他に次のように見られる。

- ・羅伯比耳（R：ロベルトピール）は今世の最も勉強なる人なり 〈1.28〉
- ・旅中勉強にして倦まざることを記して曰く 〈1.32〉
- ・才能ありて且つ勉強なること 〈2.11〉
- ・かくの如く勉強なることは怪しむに足りず 〈3.1〉
- ・達爾東の勉強なることは童子の時より癖習となりたり 〈5.22〉
- ・古勞徳羅倫は勉強にして倦むことなきによりて 〈6.7〉
- ・その余は勉強なる農民に借し 〈9.18〉
- ・実に何事をなすにも勇氣あり知識あり又甚だ勉強なりし 〈13.41〉

これらの用例を見ると、現代との文法的性格が異なる点は勿論であるが、意義的にも「精を出す、勤勉に働く」といったことを指している点で違和感がある。〈5.22〉は一見現代の主たる意義と思われる「学習をする」のようにも受け取られるが、原文はこの後、この人物が十二歳の時から郷校の童子師となつて冬はそこで働き夏は父親の農耕を助けて従事したと続き、労働に努めたことを称揚する件となっている。他の用例に就いても同様に、やはり現代の使われ方とは距離を感じる。

『西国立志編』の作品世界自体が国民各人の自立と努力とを繰り返し強調することもあって、この漢語「勉強」の使われ方が余計に目立つということはあがあるが、「勉強」のサ変動詞用法自体に就いてみても、現代の目でもって見ると、これまた馴染みのない趣が漂う。ヲ格を取るものに就いて例を挙げて見れば、次の通りである。

- ・インダストリアル・インデペンデンス〔工事（シゴト）を勉強するよりして生ずる自主自立の権（イキホヒ）は〕 〈1.6〉
- ・忍耐（シンボウ）恒久（キナガ）の心を以て職事（シゴト）を勉強する人 〈1.7〉

- 恭敬・自（ミ）ら恭敬すべき事 〈11.20〉 他
 教養・故にその子を教養する事備はらず 〈7.4〉 他
 漁獵・この水中の宝庫を漁獵すべしと忽ち思ひ起せり 〈7.4〉
 警醒・懶惰の人を警醒（メヲサマシ）し 〈12.20〉
 謙虚・賢智の人は自（Rミ）ら謙虚して 〈4.18〉
 倦怠・その友大に倦怠し 〈11.15〉
 光栄・みな戦死して英国を光栄す 〈8.20〉
 交互・糸を交互（イリチガヒ）して 〈2.13〉
 困難・忽ち大に困難し 〈6.10〉
 思想・懸空（テガムリナク）に思想（カンガヘ）して 〈3.2〉 他
 集会・商賈及び船主を集會し 〈8.25〉
 習慣・自（オ）ら習慣して 〈12.1〉 他
 住居・数年の間こゝに住居したり 〈2.12〉
 障礙・これがために障礙せらるゝ故 〈8.23〉 他
 衝擊・敵の翼を衝擊せしかば 〈8.15〉 他
 親愛・これを知るもの尊敬親愛せざるものなかりき 〈13.21〉
 戦慄・少しも戦慄（オノノキヲソル）せず 〈11.28〉
 附近・これと親炙し附近するものをして 〈12.1〉
 褒賞・奈的（ナイト）の爵を以てこれを褒賞す 〈7.4〉
 彷彿・其父に彷彿せり 〈2.11〉
 発作・右膝（ヒザ）に疾を得て時々発作しければ 〈3.4〉
 利益・仁善を行ひ一世を利益する人は 〈12.1〉
 力作・蓋し人の毎日力作（ホネヲリ）して衣食すべきは 〈10.4〉
 力学・その英才を以て力学せしにより 〈1.14〉
 劳苦・心を以て勉強劳苦するもの 〈2.1〉
 劳作・劳作して怠る事なく 〈1.20〉 他
 労働・身体を労働するの益 〈11.3〉
- ②『西国立志編』：他動詞用法——『岩波国語辞典』第四版：自動詞用法
- 運動・童子をして自由に身体を運動し康健ならしめ 〈11.43〉
 降伏・吾輩こそはこれ等を降伏し使役するの主人なり 〈8.8〉
 調和・音韻（テウシ）を調和（シラベル）する事を学び 〈2.8〉 他
- ③『西国立志編』：形容動詞——『岩波国語辞典』第四版：形容動詞相当用法の指示無
- 慣熟・運用の慣熟なるにあり 〈11.11〉
 謹慎・盡く皆小心謹慎にして 〈12.38〉

近代漢語の一考察

— 洋学資料に於ける「勉強」の用例から —

坂 本 浩 一

I. はじめに

明治初期の漢語には、現代とは使用上の性質を異にしているものが多い。先に筆者は、対訳辞書『漢語英訳辞典』の調査から、その一端を明きらめようとした^(註1)が、今回は『西国立志編』と『和英語林集成』英和の部を中心に、当期に於ける漢語使用の実態に就いてより具体的な形で検討を進めて行きたい。

II. 『西国立志編』の用例から

中村正直の『西国立志編』は有名な明治初期のベストセラーであるが、該書中には、現代に於ける用法と趣の違う漢語が散見する。例えば、次のようなものである^(註2)。

- ①『西国立志編』：動詞用法 — 『岩波国語辞典』第四版：動詞用法の指示無
- 衣食・蘭加舎（Rランカシャー）の手工を以て衣食するもの 〈2.10〉 他
 - 運輸・一隊は舟に乗りて貨物を運輸（ハコブ）せんとす 〈4.21〉
 - 炎熱・最も重き鉄を炎熱（アブリアツク）するは 〈6.15〉
 - 化石・近地に得るところの生物の化石せるものと比較し 〈5.20〉 他
 - 慣習・工人の慣習（シナレタ）せる手を以て運用するに 〈2.6〉 他
 - 甘心・予甘心してこれを受くべし 〈8.21〉
 - 完全・その人と為（ナリ）を完全するに於て 〈13.14〉
 - 艱難・艱難して衣食を得るは 〈9.7〉
 - 歓楽・他人をして喜悅歓楽せしむるものなり 〈13.16〉
 - 貴重・真正の貴重せらるゝ人 〈10.28〉 他
 - 究極・工巧（タクミ）を究極（キハメ）しけり 〈2.12〉 他
 - 休養・暫らくその精神を休養せんが為めに 〈11.24〉
 - 教訓・檻褻（ボロボロヲキル）なる子女を教訓する事を以て 〈12.8〉 他